

「わたしたちの失恋」

内山哲生

## 登場人物

小橋達規(21)∴	大学3年生
小川百合奈(21)∴	大学3年生
中道龍太郎(21)∴	大学3年生 達規の友人、同じ大学
尾形亮介(21)∴	大学3年生 達規の友人、同じバイト先
鈴木咲(21)∴	大学3年生 百合奈の親友、同じ大学
田中靖子(21)∴	大学3年生 百合奈の親友、同じ大学
サラリーマンA, B∴	達規のバイト先の客
女性A(21)∴	達規のバイト仲間
大内浩樹(21)∴	靖子の友人
神楽坂(22)∴	百合奈のバイト先の先輩
女友達1〜3(21)∴	靖子の友人

○達規のアパート・部屋（昼）（数ヶ月前）

1Kの部屋、窓から日が差込んでいる。  
ベッドの上で布団にくるまっている小

橋達規（21）と小川百合奈（21）

達規M「これは、ある日のわたしたち」

百合奈「寒いね」

達規「…寒い」

百合奈「…」

達規「いっせいのーで、出ない？」

百合奈「わかった」

達規「いくよ、せーの」

と、掛け声をするも、二人とも出ない。

達規「（笑いながら）出てよ」

百合奈「（笑いながら）いま、せーのって言

ったじゃん」

達規「いや、せーのもいっせーのも変わんな

いでしょ」

百合奈「…てかどうする？」

達規「でもさ、カフェって結局全部おんなじ

だよね」

百合奈「おしやれなカフェのメニューと普通のカフェのメニュー、違ってあるのかな」  
達規「ないない。そういうのは違いのわかる人が行けばいいんじゃないかな」  
百合奈「違いのわからない人達だもんね。わたしたち」

達規M「ちなみに今日はおしやれなカフェに行く予定だった。けど多分行かない」

× × ×

ベッドの上に座り壁に寄りかかる達規と百合奈。

百合奈が達規に寄りかかっている。

達規M「そこからは、いつもの感じ」

百合奈「もし叶うならさ、たっちゃんの体の中に入って、たっちゃんと私で一人の人間になりたいな」

達規「…百合奈は？どこいっちゃうの？」

百合奈「私は…達規っていう人間で生きていくよ」

達規「じゃあさ、百合奈もいるわけだし、新

しい名前、考えないかね」

百合奈「：小川達規？」

達規「いやそれただ、俺が婿養子に入っただけじゃん」

百合奈「（笑って）確かに：」

笑い合っている達規と百合奈。

達規M「お互い、どうでもいい話をしあって」

× × ×

達規と百合奈、背を向け寝転がってる。

達規、スマホで漫画を読んでいる。

百合奈、鼻歌を歌いながらSNSの写真

真にいいねをつけている。

達規M「一人の世界に入って」

× × ×

向き合って寝ている達規と百合奈

達規M「また二人になって」

百合奈、目を覚ましていて、達規の頬に冷え切った手を置く。

達規、びくっと体が動き、起きる。

百合奈「目、覚めた？」

達規「…（寝起きで）何？」

百合奈「さつき、おじさんと合コンしててね、つまんなかった上に6000円も取られたんだよ？夢ん中ぐらいイケメンと合コンして6000円奢られたかったよ」

達規「…夢の中ぐらい、幸せでありたいよね」

達規、スマホを手に取り、『合コン

おじさん 夢占い』で検索する

達規M「彼女が見た夢を聞いて、俺が夢占いを調べて、まあ大体こんな感じ」

× × ×

玄関先で百合奈を見送る達規。

達規「部屋の片付け、ありがとね」

百合奈「…ドライヤーのコード、またピョーンってなってたよ」

ドライヤーのコードが垂れている。

達規「まとめるの苦手なんだよね」

百合奈「うん、またね」

と、扉を開けて、出ていく百合奈。

達規「着いたら連絡して」

百合奈「（笑顔で）うん！」

それを見て笑顔になる達規。

達規、部屋に戻りベッドに腰掛け、

スマホを手に取り見ている。

達規M「どうでもいい話はどうでも良くない人に話すし、鼻歌だって、夢の話だって、信頼してる人の前でしか出来ない。僕たちは上手くいっている。そう思っていた。」

○ 駅前のファミレス・店内（数ヶ月後）

奥にソファー、手前に椅子のある席。

達規、ソファー側に座っている。

達規の目の前にはカフェオレ、百合奈の目の前にはコーヒーが置いてある。

達規「ラインの返信、遅くなったのは謝るよ」

百合奈、手前の椅子に座っている。

百合奈「：それは平気」

達規「最近会えてなかったから寂しかったとか？」

百合奈「：いや全然」

達規「会うたび楽しいよね？今でも」

百合奈「：楽しいね」

達規「（少し考えて）俺はさ、百合奈のこと好きだし、一緒にいたいよ」

百合奈「うん……」

達規「これからさ、就職して、少しずつ余裕できたら、二人で同棲して結婚して、子供ができてとか：」

百合奈「：ごめんね」

達規「いや：いきなりすぎるって！本当ちやんと考えた？」

百合奈「（呆れた感じで）：考えたって」

達規「理由は？なに？」

百合奈「（少し考えて）……」

達規「考えてないじゃん」

百合奈「だから：（少しイラつく）」

達規「とりあえず距離置かない？今は冷静になる時間が必要だと思うから」

百合奈「私は冷静だけど：」



達規「いいから、ね！とりあえず距離おいて

みよ？」

百合奈「……うん」

達規「ありがとう…」

ほっと一息つきカフェオレを飲む達規

百合奈「仮に、一週間距離をおいたとして、

今日の私の気持ちと一週間後の私の気持ち、

変わらないと思うよ」

達規「（動揺するが隠して）…大丈夫」

百合奈、コーヒーを一口飲む

しばらく沈黙が続く

○ 駅前のバス乗り場（夕）

並んでいる百合奈と達規

達規「歩かない？百合奈んちまで」

百合奈「遠いよ？」

達規「大丈夫、送ってく」

百合奈「そっか」

○ 路上（夕）

横並びで歩いている達規と百合奈

気まずい雰囲気の中、手を繋ごうとする達規

百合奈「（手が触れたところで）いつも繋いでないじゃん」

達規「…いや繋ぎたいなあって」

百合奈「……」

と、仕方なく手を繋ぐ百合奈。

達規 2人がよく通った洋食屋を見つけ、

達規「（百合奈の方を見て）あそこ、よく行ったよね」

百合奈「（正面を見ながら）そうだね」

達規「美味しかったよね、ハヤシライス」

百合奈「うん、おいしかったね」

達規「……お腹空いてない？」

百合奈「空いてない」

達規「そっか」

○百合奈のアパート・外（夕）

家の前に着き、手を離す百合奈

百合奈「：さよなら」

達規「さよならって：」

彼女と会うのが最後かもしれないと思

い、涙が出てて下を向く達規。

百合奈「（それを見て）どうしたの？」

達規「（泣きながら）：なんでもない」

泣く達規を見て涙が出てくる百合奈。

達規、勢いよく百合奈に抱きつく。

百合奈、体を預けるが腕を回さない。

達規「俺、百合奈のこと好きだよ」

百合奈「：うん」

達規「連絡待ってるから」

百合奈「：ありがとう」

百合奈の体から離れる達規。

達規「じゃあ、またね（と笑顔で）」

百合奈「（達規の笑顔で笑顔になり）またね」

と、自宅へ歩いていく百合奈。

達規、その背中を見つめている。

○ T 「小橋達規」

○日替わり・達規のアパート・部屋（朝）

達規、ベッドの上に座り、後ろの壁にもたれかかって、ぼーつとしている。

達規M「あれから一週間経った。彼女からの連絡はない」

龍太郎「（電話越しに）：おはよう」

達規「おはよう」

達規M「毎晩のように男友達と寝落ち電話をしている」

○大学・構内

昼休憩で食堂に行く道中、横並びで歩く、中道龍太郎（21）と達規。

すると、目の前から歩いてくる百合奈と鈴木沙希（21）と田中靖子（21）。

龍太郎「：まじか」

達規「今から笑顔で話しかけるから、それに合わせて、いい？」

龍太郎「え？うん」

すれ違いざまに、達規、百合奈と目を  
合わさずに、龍太郎に話しかける。

達規M「落ち込んでる感じとか、見せたくな  
くて、平気を装った」

#### ○同・食堂

向かい合って座る達規と龍太郎。

龍太郎、学食を食べている。

達規、食わずにスマホをいじっている  
百合奈のSNSに達規との写真が無く  
なっていて、

達規「…消されてるわ」

龍太郎「…。食べないと元気でないよ」

達規「俺と龍太郎は今、雪山で遭難してます」

龍太郎「うん？」

達規「食料が底について瀕死の状態。そんな  
中、俺のリュックから菓子パンが見つかり  
ました。俺、その菓子パンの半分を龍太郎  
に出して、『食べないと、元気でないよ』、  
って…龍太郎どうする？」

龍太郎「…食べるね」

達規「だよね！元氣出るもん。死にたくないもん。でも今失恋しそうで落ち込んでるよね、今お腹パンパンにしても元氣でないよね。だから食べても無駄だよ、分かる？」

龍太郎「…（めんどくさそうに）そうだな」

達規「まあでも遭難してるようなもんか…あんなに上手くいったのに…わかんないなあ（と机に手をつき、伏せる）」

龍太郎「…てかさ、付き合って何年だっけ」

達規「…約2年」

龍太郎「約ってなんだよ」

達規「本当は1年9ヶ月だけど、四捨五入して2年」

龍太郎「俺、付き合う年月サバ読むやつ初めて見た」

達規「…もし、百合奈が次誰かと付き合って、1年10ヶ月超えたら、俺死にたくなるもん」

龍太郎「…：…どんなところが好きなの？」

達規「どんなところ？」

龍太郎「好きな理由とか？」

達規「いや、好きが理由だから」

龍太郎「……」

達規「だって、理由より先に好きがくるでしょ？」

龍太郎「……それが恋愛じゃないの？」

達規「……じゃあ、好きがきたのは、いつ？」

龍太郎「それは……」

○回想はじめ・路上

百合奈と待ち合わせしている達規

そこへ、百合奈がやってくる。

百合奈、達規に「遅れてごめん」と謝

っている

達規M「最初はなんとなくいいなって思っ

て付き合ってた。そこから1ヶ月ぐらいのとき

かな、まだお互い、素とか出せなくて」

達規、百合奈の手を繋ぎ、歩き始める

達規M「そんなとき」

向かいからイチャイチャしているカップルが歩いてくる。

達規 M 「人前で素を出し過ぎてるカップルがいた」

女性はサングラスをし、男性は親指に指輪をしている。

カップルをチラッと見て目を逸らすと、目が合い笑い合う達規と百合奈。

達規 「：あの女の人の、夜なのにサングラスかけてたね」

百合奈 「（笑って）男の人も親指に指輪してたよ」

達規と百合奈、笑い合う

達規 M 「お互い、笑えるところ一緒なんだなつて」

○回想戻り・大学・食堂

達規 「その日のデートはずっと楽しくて、そこからだね」

龍太郎 「そうなんだ：」



達規「…（思い出して落ち込む）」

龍太郎「俺、授業行くわ」

と、食器を持って立ち上がる龍太郎。

達規「（机に伏せながら）もうさあ…」

龍太郎「（振り返り）ん？」

達規「百合奈と付き合ってた記憶、全部消し去りたい」

○達規のバイト先・居酒屋・店内（夜）

よくある大衆居酒屋。

大学生やサラリーマンで賑わっている。

達規、生ビールの入ったジョッキを2つ持ち、運んでいる。

達規M「失恋しそうな時でも、当然バイトはある」

達規「（真顔で）お待たせしました。生二つです」

と、酔ったサラリーマンA、Bの前にジョッキを置く達規。

サラリーマンA「（達規の名札を指差し）頑張っていないじゃん」

とサラリーマンA、B笑っている。

達規の名札に、名前と一緒に

『笑顔で頑張ります』と書いてある。

笑っているサラリーマンA,B

達規「ああ…（愛想笑い）」

サラリーマンA、B、達規に絡み続けている。

達規M「で、こういう時に限って絡まれる」

○同・厨房

達規、尾形亮介（21）と立ち話をしている。

達規「笑顔で頑張ります、って書いてあるってことは、笑顔で頑張れないから頑張りますって書いてあるわけで、100%の笑顔を求められても、困るっていうか…だってまだ笑顔の発展途上だもん、ね！」

亮介「そうか！それは災難だったな！」

達規「（厨房に手をつき）…はあ」

亮介「どうした！」

達規「…こうさ、ニコって笑顔するんだよな

百合奈って…ニコって」

亮介「…飲みいくか！」

達規「また？」

亮介「よし！いくぞ今日も！」

と、亮介、達規の肩に手を回す

○駅前の居酒屋・店内（夜）

大学生やサラリーマンで騒がしい店内

四人がけの席に座っている亮介と達規、

達規M「ここ1週間、毎晩二人で飲んでいる。

その度、いつも思う」

亮介、片手にビールを持ち、

亮介「元気出せって！な！」

達規「…うん」

亮介「まだ別れたわけじゃないんだろ」

達規「そうだね…」

亮介「（肩を叩き）次はいい人見つかるって」

達規、苦笑いで亮介の話を聞いている。

達規M「元気出せ、次はいい人見つかるって。  
なんて、冷たい言葉なんだろう」

そこにバイト仲間の女性A（21）が  
来る。

女性A「お疲れ！」

亮介「お、お疲れ！」

女性A「達規が悩んでるって言うから来たよ」

亮介「（達規に）いやさあ、男の俺らよりも、  
いい相談相手になってくれそうだったから  
さ」

達規「…ありがとう」

女性A「（座りながら）どうした？そんな落ち込んで」

亮介「いや、こいつ、彼女に振られそうらしくてさ」

達規「…振られないための方法とかなんかあるかな」

女性A「…（少し考えて）達規ならいい人見つかるって」

と、女性A達規の肩を叩く。

達規M「類は友を呼んだ」

○カラオケ・店内（深夜）

バックナンバーを熱唱する達規。

達規M「カラオケに行ってバックナンバーと」

マイヘアを泣きながら熱唱する達規。

達規M「マイヘアを熱唱した」

その様子をひたすら見る亮介。

達規M「亮介は、いつも続けて二曲歌うことを許してくれる」

亮介「……」

歌い終わり座ってジュースを飲む達規。

亮介、泣いている達規を見て、

亮介「そんなに好きだったんだな」

達規、涙を拭い、画面を見て放心状態

亮介「元気……（といいかけ）出せないよな」

達規「……」

達規M「なんか、分かってもらえた」

○日替わり・達規のアパート・部屋（昼）

達規、ベッド前の床に座りスマホで、

『復縁 方法』と検索している。

達規M「落ち込むことに疲れたので、復縁、スペース、方法で検索してみた」

『僕が復縁した9つの方法』というホームページをクリックする。

× × ×

ベッドに寝転がってスマホを見る達規。

胡散臭い復縁セミナー動画が流れてる。

セミナーの男「（身振り手振りをしながら）

恋愛において男性と女性は、常に追う追われるの関係性でないといけません！例える

なら、男性はシマウマ、女性はライオン！」

見終わり、入会のボタンをクリックし

そうになる達規。

ふと我に返り、ホームページを閉じる。

達規M「危うく入会しそうになった」

○日替わり・本屋・店内

達規M 「怪しくない、本屋に来た」

達規、本を出しては本棚にしまうのを  
繰り返している。

達規M 「男の脳と女の脳の違いたな本を片っ  
端から立ち読みした」

ある本で止まり、何かに気がつく達規。

達規M 「昨日見た、動画セミナーとおんなじ  
ことが書いてあった」

本の中の挿絵で、女性の顔＋ライオン  
の身体が、男性の顔＋シマウマの身体  
を追い掛けているイラストがある。

本を閉じて悩みながら棚に戻し店を出  
ようとす達規。

× × ×

書店員 「ありがとうございましたー」

本を手に持ち店を出る達規。

達規M 「結局買ってしまった」

○ファミレス・店内

奥にソファー、手前に椅子のある席。

椅子に座る達規。

そこに咲がやってくる。

咲「どうも」

達規「（振り返り）どうも、（ソファア―を差し）どうぞ」

会釈をして座る咲。

達規「どうしますか？」

と、タッチパネルを見せる

咲「（受け取り）ありがとうございます」

達規「今日来てくれてありがとうございます」

咲「いえ、全然」

達規「百合奈、最近どうですか？」

咲「どう？…あつ、男の人なら寄ってきてても、

全部跳ね返してます」

達規「あつ、そうですか（少しニヤつく）」

咲「はい！…でも、いつもの喧嘩の延長線上

ですよね？」

達規「いや、普段別れたって言うのは僕の

方で、彼女が言ってきたのは初めてなんで」

咲「…それよく聞いてます」



達規「ですよね」

咲「……」

達規「百合奈が普段言ってた、僕の事聞きたいなって思って、咲さん呼びました」

咲「…でも、思ってたイメージと違いました、達規さんの」

達規「え、どんなイメージだったんですか？」

咲「いや、普段百合奈から…（席を指差し）

こういう席あるじゃないですか？こっち側（ソファーを軽く叩き）譲ってくれないとか。あとメニューも自分だけ見て、見せてくれないとか。でもさっきやられてたから」

達規「ああ」

咲「あ、もしかして百合奈にはやってないんですか？」

達規「多分、出来てないです…」

咲「…あ、あと、おしゃれな店、先に入らせてくるとか…」

達規「あ、メモしてもいいですか」

咲「どうぞ」

達規、スマホにメモをしだす。

咲「あと、なんでも、半分ずつにして食べた  
かったみたいです」

達規「（メモしている）……」

咲「それと…（少しためて）LINEのト  
ク履歴、頻繁に見てくるとか…」

達規、一瞬動きが止まるが、再びメモ  
をしだす

咲「…でもすごいです。こんなに人のために  
変わろうとしてる人、初めて見ました」

達規「でも、変わり続けてくれたのは、多  
分彼女の方なんです」

咲「…いい人になろうと思ってる人は、もう  
いい人です」

達規「…（手が止まり、咲をみる）」

咲「あ、続けてください」

達規「あ、はい」

と、再び話しだす二人

○達規のアパート・部屋（夜）

ベッドに座り買った本を読む達規。

達規「…男はシマウマ、女はライオン…」

本を閉じ、スマホを取り出す。

百合奈にLINEを送ろうか迷っている。

意を決し『おはよう』とLINEを送る。

すぐにスマホの電源を切って、ベッドに倒れる達規。

達規M「男はシマウマなので、LINEは遅く返す事を心がけよう」

気になって電源を入れそうになり、スマホをカバンにしまいベッドに座る。

また気になって、カバンからスマホを取り出し電源を入れると『夜だけど笑』と返ってきていた。

早く返ってきたことに驚き、つい返信を打ってしまう達規。

達規M「早くきたことに驚いて、早く返してしまった」

達規、スマホを充電器に挿し、散らかっている部屋を片付け始める。

×××

片付け終わり、ご飯を食べている達規。

達規M「自炊と片付け、毎日頑張ろうって思  
った」

○日替わり・達規のバイト先・居酒屋（夜）

達規、サラリーマンA、Bに笑顔で接  
客している。

サラリーマンA「頑張ってるじゃん」

達規M「バイトも笑顔で接客することを心が  
けた」

○達規アパート・部屋（夜）

達規、ベッドに腰掛けてスマホと睨み  
合いをしている。

達規M「どうしても返したくなかった時は」

○日替わり・路上（夜）

思いつきり走る達規

達規M「思いつきり走ることにした！」

○日替わり・達規のアパート・部屋

達規、ご飯を食べている。

達規M「そんな毎日を送り、1週間が経った」

達規、百合奈にLINEで『おしゃれなカフェ行かない？この前行けなかったとこ』と送信する。

達規、スマホを見ると百合奈から

『行きたい』と返信がきている。

それを見て微笑んでいる達規。

○日替わり・同（朝）

達規M「そして、日曜日」

服を選んでいる達規。

達規M「彼女のためにおしゃれをするのはい  
つぶりだろう」

洗面所に向かう、達規。

髪を濡らしドライヤーで乾かしている。

セットが終わり、ドライバーのコードをしつかりとまとめる。

#### ○車内

運転している達規。

助手席には、百合の花束が置いてある。

達規、それをチラッと見て、また前を向き、運転に集中する。

達規M「サプライズってやる意味ある？って思ってたけど、今日は百合奈のために小さなサプライズをしてあげようと思った」

達規の運転する車が遠くへ行き段々小さくなる

※以降、百合奈視点

○回想はじめ・路上

数ヶ月前

歩いている百合奈と達規。

百合奈、スマホで地図アプリを見て目的地に向かってる。

それについて行く達規。

百合奈M 「これはある日のわたしたち」

百合奈M 「彼と久しぶりの外出デート。私は、目的地であるおしゃれなカフェに行くため、地図アプリを見ることに必死だった：：だけど彼は：：」

達規 「そしたらノブがさ、ワイプで突っ込んでて：：」

百合奈M 「昨日見たクセスゴが、面白かった、という話をしてくる」

聞きながら、道案内している百合奈。

百合奈M 「彼の話に相槌を打ちながら、目的地に向かうことは困難で、だから：：」

× × ×

目的地とは全然違う、コインランドリーに着いてしまう百合奈と達規。

百合奈M 「当然、こうなる」

達規 「ちゃんと地図見ながら向かった？」

百合奈 「（少し怒り気味に）向かったけど」  
達規 「：：ちよっと貸して」

と、百合奈からスマホを取る達規。

百合奈、スマホを取られて、

百合奈 M 「だったら自分でやれよって、そんなこと思い出したり」

○回想戻り・ファミレス・店内

達規、百合奈を必死に説得している。

百合奈 M 「今日だってそう。私を引き止めようとする日なのに、またソファ側に座っている」

百合奈 M 「座ってることが許せないんじゃない。こっち座る？の一言もなく座ることが許せない」

○路上（夕）

手を繋ごうとしてくる達規

百合奈 M 「久しぶりに手繋いだけど、手汗すごいなこの人、とか思ったり…」

○百合奈アパート・外（夕）



達規とハグをしていた体を離して、達

規に手を振る百合奈

百合奈 M 「好きじゃないって、なんでも許せなくなるし、彼の行動全てがイラついて」

達規に背を向け泣きながら部屋へ向かう百合奈。

百合奈 M 「なのに私は一人になることが怖くなって、先延ばしにしてしまった」

○百合奈のアパート・部屋（夕）

百合奈、泣きながらドアを閉め部屋に入り、ベッドの上に乗る。

× × ×

一旦冷静になろうと、ベッドの上に散らばった洗濯物を畳んでいる百合奈  
ふと、ニットを手に取り畳もうとする。

百合奈 M 「これ、彼に選んでもらったニットだな」

ニット手に持ちながら、散らばった洗濯物を見て、

百合奈 M 「これも、これも」

部屋を見渡す百合奈。

百合奈 M 「ふと気付いた。この部屋、彼の好きな物と彼に選んでもらった物で溢れている」

ニットを手に持ったまま、テレビ横に置いてある写真立ての中の達規とのツーショット写真を見る百合奈。

百合奈 M 「この2年間、いったい私は私を生きていたのだろうか」

その写真立てをバンと伏せる百合奈

○ T 「小川百合奈」

○ 日替わり・大学・外観

T 「1週間後」

○ 同・食堂

向かい合い、昼食を食べる咲と百合奈。

咲、スマホで百合奈のインスタを見て、

達規が映る写真が無い事に気が付き、

咲「（スマホを見ながら）…投稿消したんだ」

百合奈「…非表示にした。」

咲「…まあそうだよね」

机に置いてある百合奈のスマホのLI

NEの通知音が大量に鳴る

咲「（スマホを指し）大丈夫？」

百合奈、LINEを開き、咲に見せる。

そこには、それぞれ違う男の人から送

られてきた大量の『久しぶり！元気？』

というLINE

百合奈「インスタ、監視されてるのかな」

咲「…普通、狙うなら、別れた後だもんね」

百合奈M「彼女、鈴木咲。口癖は、普通…」

咲「でもさ、よく2年も付き合えたよね」

百合奈「…好きだったからね」

咲「…いや普通、会うたびにLINE見せて

とか言われたら、別れるけどね、」

百合奈「：いや別にやましいことないから、  
見せていいでしょ」

咲「でも普通、大好きな彼氏に信用できない  
とか言われ続けたら別れるでしょ、普通！」

百合奈「でも、信用させられない私も悪いと  
思うけど…」

咲「：って、こんな感じでいつも話してんじ  
ゃん私たち、で、なんで今回は別れたいつ  
て思ったの？」

百合奈「：好きじゃなくなったから」

咲「うん、理由は？」

百合奈「理由：」

咲「ほら、彼のこういうところが嫌で、一氣  
に覚めました、みたいな…」

百合奈「：好きじゃなくなることに理由なん  
てないと思う。好きって気持ちいだんだん  
消えてって、ある日パンって好きじゃなく  
なるんだよ…：え？そうだよね？」

咲「うーん、じゃあ、そのパンって好きじゃ  
なくなったのは？いつ？」

百合奈「：好きじゃないことに気がついた日  
なら覚えてる」

○回想はじめ・百合奈のアパート・部屋（夜）  
ベッドでスマホを見ながら寝転がって  
いる達規。

机の上の物を片付ける百合奈。

百合奈M「その日は確か、私の部屋で」

百合奈、達規をチラッと見て、

百合奈「ねえ、片付けて」

達規「（スマホ見て）うん、やるやる」

百合奈「手伝って」

達規「（スマホ見て）今見てるから」

百合奈「：（ため息をつく）じゃあいいよ」

百合奈、無言になる

達規、ムクっと起き上がり、

達規「使ったもの、一回一回しまわないから

悪いんじゃないの」

百合奈「え、何？」

達規「使ったもの出しっぱなしにして、それで片付けるとき、自分でイラついてき、だ  
いぶ効率悪いことしてると思わない？」

百合奈「別にイラついてないけど」

達規「イラついてんじゃん。ため息ついてた  
じゃん」

百合奈「ため息ぐらい、つくよ。いつつもた  
っちゃんの部屋掃除してるのに、なんでこ  
っちは手伝ってくれないの？」

達規「俺の部屋の話じゃなくて、いま百合奈  
の部屋の話だよ」

口喧嘩をしている百合奈と達規。

百合奈M「私たちの喧嘩は毎回決まっておん  
なじ。お互いに口論を続けて、最終的に」

達規「じゃあ別れる？もう」

百合奈M「と彼が言う」

百合奈、部屋を出ようとする。

達規「どこいくの？」

百合奈「コンビニ」

百合奈 M 「そしてわたしは、頭を冷やすために外にいった」

○コンビニ・店内（夜）

2つ並んだプリンの中の1つを取る百合奈。

百合奈 M 「いつも、お互いの分のプリンを私が買って、それを渡して仲直り、のはずだったけど」

もう1つを手にとろうと思うが、軽くため息をつき、取らず、その手を下ろし、レジに向かう

○回想戻り・大学・食堂

百合奈 「買えなかったんだよね、彼の分。ほら、好きになったらなんでもしてあげたくなるでしょ。でもしたくないって気が付いたって言うか」

咲 「へー：まあでもこれで晴れて自由の身なんだから、他の人見つけてみるのもアリだと思うけど」

百合奈「：まだ無理だよ」

そこに靖子が両手に紙袋を持って来る。

咲「（見つけて）あ、靖子：」

扉を開けるのに必死な様子の靖子。

百合奈「いつも、荷物多いよね」

咲「靖子が、持ってるさ、紙袋のブランド当

てよ？」

百合奈「え？：イヴサンローラン」

咲「コーチ」

靖子「（近付き）ごめーん！課題やってて、遅れた」

百合奈、咲、靖子の紙袋を見ると、ど

こか分からないブランドの紙袋で、

顔を見合わせて「どこ？」と笑い合う。

#### ○同・食堂

横並びで話しながら歩く咲と百合奈。

目の前から歩いてくる達規と龍太郎と

すれ違う。

咲「（通り過ぎて）あれ、元気そうだったね」



百合奈「うん、なんか安心した」

○同・構内（夕）

咲、手を振りどこかへ行く。

百合奈と靖子、手を振る。

百合奈M「彼女、田中靖子。大抵なんにも聞いていない」

靖子「（百合奈に向かって）え？別れたの？」

百合奈「厳密にいうと、別れそうかな…」

靖子「えーそうなんだ！元気出して！」

百合奈「…（苦笑いで）ありがとう」

靖子「あ、ねえ！そういえば、百合奈に紹介したい人がいたんだった」

靖子、スマホを取り出し、調べ始める。

百合奈「靖子？まだ別れそうなだけだよ？別れたわけじゃないよ？」

靖子「でも、いい人だから、ね！」

百合奈「…」

○居酒屋（夜）

百合奈、靖子、向かい側に大内浩樹

(21) が座っている。

靖子「彼、大内浩樹君。経営学部の2年生！」

大内「はじめまして、大内です。好きな言葉

は、意気投合です！（とグーサインする）」

百合奈「：はあ」

靖子「そして彼女が私の親友、小川百合奈！」

百合奈「はじめまして、小川百合奈です。：

好きな言葉は：十人十色です。」

靖子「てことで、ごめん。お手洗い行つてく

るね！」

百合奈「：うん」

大内「あ、彼氏さんとのこと聞きました！僕

で良ければ話聞きますよ」

百合奈「あ、ありがとうございます。」

× × ×

百合奈M「で、なんか気づいたら、彼がヒー

トアップしてて」

大内「（身振り手振りしながら）その、違規  
って人は多分、親しき中にも礼儀ありを知  
らない人だと思っんですよ！……」

と、語り続ける大内。

百合奈「……靖子遅いですね」

と、お手洗いの方を覗く百合奈。

別の卓で飲んでいる三人組の女子達に  
混ざり、立ち話している靖子

靖子「（女子三人に）偶然だね、本当に」

百合奈、それを見て

百合奈M「田中靖子、紹介するけど、責任は  
取らない」

百合奈「なんか知り合い見つけたみたいですよ」

大内「そうですか……話を元に戻しますね、……」

百合奈「はあ……」

百合奈M「わかんないけど、この人なんか苦  
手」

○日替わり・大学・食堂

向かい合い昼食を食べる百合奈と咲。

百合奈「で、そのあと、靖子と大内くんとその女子三人組で、カラオケに行ったらしい」

咲「え？その三人と大内君は知り合いなの？」

百合奈「初対面だって…」

咲「…意気投合したんだ」

百合奈「（少し笑って）…だね」

咲「いつも思うけど、友達の紹介ってロクなことないよね」

百合奈「…そうだね」

咲「なんかもっと周りにいないの？めんどくさくない人」

百合奈「めんどくさくない人？」

咲「そう。優しくって、優しくって、優しい人」

百合奈「優しすぎる人か…」

○百合奈のバイト先・カフェ・店内（夜）

百合奈、お客様が使った皿を端に重ねて、テーブルを拭いている

神楽坂「手伝うよ」

と、神楽坂（２２）がやってくる。

百合奈 M 「この人、神楽坂さん。1週間ぶりにバイトが被った。」

百合奈 「ありがとうございます」

皿を持って去っていく神楽坂を見ている百合奈。

百合奈 M 「神楽坂さんはいつも優しい」

× × ×

ゴミ袋をゴミ箱から取り出そうとしている百合奈。

重くてなかなか取れない。

百合奈 M 「ゴミ袋がなかなか取れない時も」

そこに神楽坂が来て、

神楽坂 「手伝うよ」

と、ゴミ袋を受け取り、ゴミ箱から取り出す神楽坂。

百合奈 M 「そんな彼、実は『久しぶり！元気？』ラインを送ってきた一人だった」

取り終わり、ゴミ袋を縛っている神楽坂を見る百合奈。

百合奈 M 「彼にとっての1週間は久しぶりらしい」

○同・外（夜）

店の鍵を閉める神楽坂。

止めていた自転車を持つ神楽坂。

百合奈 「お疲れ様でした」

神楽坂 「お疲れ、駅まで送っていくよ」

百合奈 「え？：あ、はい」

百合奈と自転車を押す神楽坂、歩き出す。

沈黙している神楽坂と百合奈

× × ×

まだ沈黙して歩いている、百合奈と神

楽坂

百合奈 M 「あ、この人ほんとに駅まで送るだけなんだ」

百合奈 「あ、あの、彼氏と別れるか別れないか迷ってて：」

神楽坂 「：そうなんだ」

百合奈 「どうしたらいいですかね…？」

神楽坂 「うーん…：わかんない」

百合奈 「そうですか」

再び沈黙になる、百合奈と神楽坂。

百合奈 M 「めんどくさくない人って、逆にめんどくさかった」

× × ×

駅についた百合奈と神楽坂。

百合奈 「送ってくれてありがとうございます」

神楽坂 「…今からさ、飲み行かない？」

百合奈 「…課題あるんで、また今度で」

神楽坂 「そっか、じゃあ気をつけて」

と、自転車に乗り帰って行く神楽坂

○百合奈のアパート・部屋（夜）

部屋に入りベッドに腰掛け、テレビ横の伏せていた写真立てを起こす百合奈。

× × ×

風呂あがりのパジャマ姿の百合奈、ベッドの上でスマホを見ている

咲から『ごめん、今日泊まり行けない』

とLINEがきている

百合奈M「今日、久しぶりにひとり。でも寂しくなんかない」

× × ×

動画を見ながらストレッチをしている百合奈。

百合奈M「ストレッチしないといけないし」

× × ×

ベッドで実家の犬の動画を見る百合奈。

百合奈M「親から送られてきた、ココとプクの動画だってあるし」

× × ×

ベッドの上で体育座りをし、壁にもたれかかる百合奈。

達規から『おはよう』とLINEがくる。

写真立てを見る百合奈。

寂しさに負け『夜だけど笑』と返信する百合奈。



百合奈 M 「寂しさに負けた」

× × ×

暗い部屋の中、一人ベッドの上に体育座りの百合奈。

百合奈 M 「そこからはばらく、なんか達規の事ばかり考えちゃって、ずっと泣いてた」

× × ×

仕送りの段ボールから、カップ麺を取り出そうとする百合奈

だが、食欲がなく、そっと元に戻る

百合奈 M 「食欲がなくなるのって、振られる方だけだと思ってた」

× × ×

カーテンを勢いよく開ける、笑顔の百合奈。

日差しを浴び、満面の笑顔

百合奈 M 「そして二日後、泣き疲れて、それと同時にスッキリした私は、大学に行った」

○ 日替わり・大学・食堂（昼）

百合奈 M 「そこからは、彼からのLINEは」

咲と靖子と百合奈、ご飯を食べている。

百合奈のスマホにLINEがくる。

食べながら返信する百合奈。

百合奈 M 「きたら返して」

○日替わり・同・構内（夕）

百合奈と咲と靖子、座って話している。

百合奈のスマホにLINEがくる。

話しながら返信する百合奈。

百合奈 M 「きたら返して」

○日替わり・百合奈のアパート・部屋（夜）

お風呂あがりでパジャマ姿の百合奈。

百合奈のスマホにLINEがくる。

髪を拭きながら返信する百合奈。

百合奈 M 「きたら返した」

○日替わり・同（夜）

ご飯を食べている百合奈。

百合奈 M 「そして1週間ほどLINEした頃  
…」

百合奈のスマホに達規から『おしゃれ  
なカフェ行かない？この前行けなかつ  
たところ』とLINEがくる。  
『行きたい』と無表情で返す百合奈。

○日替わり・同・外（昼）

百合奈、鞆を持ち、達規を待っている。  
車が止まり、中から達規が出てくる。

達規「おはよ」

百合奈「：おはよう」

達規「：とりあえず乗って」

百合奈「：うん」

達規、百合奈の鞆を持つとするが、

百合奈「いや大丈夫：」

達規「そっか：」

達規、運転席に乗る。

百合奈、席にゆりの花束が置いてある。

百合奈「え？なにこれ」

達規「（前を向いて）ホワイトデーのお返し  
…渡してなかったでしょ」

百合奈「（花束を抱えて座り）…嬉しい…あ  
りがとう…」

達規「（照れ臭そうに微笑み）いや…うん」

○走る車のインサート・（昼）

○路上（昼）

スマホの地図アプリを開き、目的地の  
カフェに向かって道案内をしている。

達規、マップを見ながら右に曲がろう  
とすると、矢印が左に向いてしまい、

達規「え！もう…」

百合奈「わたし、やろうか？」

達規「…いや大丈夫」

○カフェ・外（昼）

カフェの扉を開けようとする百合奈。

達規「あっ」

と、百合奈の前に立ち、意を決して、扉を開け、入店する達規。

○同・店内（昼）

達規と百合奈、ソファと椅子の席に案内される

達規「（ソファ側を差し）そっち、どうぞ」

百合奈「いやいいよ、座って」

達規「いや、どうぞ」

百合奈「うん…」

と、ソファ側に座る百合奈。

達規「なににする？」

と、メニューを百合奈側に広げる達規。

百合奈「（それを見て）…」

達規「…うん？」

百合奈「いや…どれにしよう」

達規「俺は、ケーキセット」

百合奈「（メニューを見ながら）ちよつと待

ってね…」

達規「うん」

達規、じっと待っている。

百合奈「（恐る恐る）チョコケーキとチーズ  
ケーキで半分ずつにしない？」

達規「…いいよ」

百合奈「一人前食べたい人じゃなかったっ  
け？」

達規「いや半分ずつがいい」

百合奈「…そっか」

× × ×

目の前にチーズケーキとチョコケーキ  
百合奈 コーヒー、達規カフェオレが置  
かれている。

達規、ケーキを食べながら

達規「…今日晴れたね」

百合奈「…天気の話とかする人だっけ」

達規「いや…晴れてるなって」

百合奈「晴れてるね」

達規「…このカフェ映えそうだよね」

百合奈「映えとか嫌いだったじゃん」

達規「そうだね…」

百合奈「…無理して喋んなくていいよ」

達規「無理してないよ。喋りたいんだよ」

百合奈「…」

達規「…男の人と遊んだりとかした？」

百合奈「遊べないでしょ、付き合ってたんだから」

○車内・(昼)

車に乗り込む達規と百合奈

達規「あそこいかない？洋食屋」

百合奈「…今食べたばっかじゃん」

達規「ハヤシライス食べたくなってる」

百合奈「…いや、」

達規「お腹すいてて…」

百合奈「…わかった」

○洋食屋・店内(昼)

店内に入る達規と百合奈。

ソファ側を譲る達規。

百合奈「(ソファを指し)座って、そっち」

達規「…分かった」

メニューを達規が取ろうとするも、

それより早く百合奈が取り、

百合奈「（達規にメニューを向け）はい」

達規「…俺はハヤシライス」

百合奈「そ…私はコーヒーでいいかな」

達規「え、いいの？」

百合奈「うん」

百合奈「（店員に向かって）すいませーん」

店員さんが来る

百合奈「ハヤシライスとコーヒーで」

店員「かしこまりました」と去る

達規「…ありがとう」

百合奈、カバンから達規の部屋の鍵を

取り出し、机に置き、

百合奈「返すね」

達規「…俺、百合奈のこと好きだよ」

百合奈「ごめん」

達規「…（百合奈を見つめる）」



百合奈「私ね、今まで付き合った人で、こう、ちゃんと好きになった人っていないかったの。好きになっても、なんか違うなって思ったり、でもなんとなく一緒にいたりして……。そんな時、たっちゃんに出会って、初めてだったの、毎日好きが増えていくってことが。駅から家までちよつと距離あるけど、話したいから歩いて帰ったり、ちよつとコンビニ行くだけでも、デートって思えたり、何にもしなくても毎日楽しくて、なんかずつと楽しかったの。でも、付き合ってから、だんだんたっちゃんが素を出すようになっていって……」

達規、涙目で何かを言おうとするが、百合奈「待って、聞いて：……。だけどね、別に良かったの。好きだったから。むしろ素を出してくれて、ますます愛おしくなったし。だから、たっちゃんはいつも通りでいいんだよ。だって魅力的だもん。でもね、私は

もう好きじゃない。ごめんなさい。ほら、  
たちちゃん、喧嘩するたびによく言ってた  
じゃん、出したら元に戻そう、って、好き  
って気持ちも、そんな感じなのかなって思  
って、だから、どこにいったんだろうって、  
必死に、戻そうって思ったけど：やっぱり  
どこにもなかった。もう、元に戻せないん  
だなって思った：だから、別れよう。」

達規、百合奈をただひたすら見つめ  
ている

#### ○車内（夕）

疲れて、沈黙している達規と百合奈。

百合奈、花束を抱え眠そうにしている

達規「（それを見て）寝てていいよ」

百合奈「いやいいい」

達規「……いいから（と百合奈の方を見る）」

百合奈「：（もう寝ている）」

達規、それを見て、少し微笑む。

前を向き、気付かれないよう涙を流す。

○百合奈のアパート・外（夕）

寝ている百合奈を起こす達規。

達規「（百合奈の肩を小さく叩き）着いたよ」

百合奈「…（起きて）ありがとう」

百合奈、カバンを持ち出る支度をする。

達規「忘れ物、ない？」

百合奈「…うん、じゃあね」

達規「うん…また」

と、百合奈、扉を開けて出ていく。

スマホを忘れていている事に気がき、スマ

ホを持ち、外へ出る達規。

達規「（追いつき、渡す）早速忘れてたよ」

百合奈「あつ、ごめん、ありがとう」

達規「…最後にハグしていい？」

百合奈「…うん」

達規、百合奈をギュッと抱きしめなが

ら、泣いている

百合奈、達規に手を回す。

達規、百合奈から身体を離して、

達規「よし…」

百合奈「今まで、ありがとね」

達規「こちらこそありがとう…」

百合奈、部屋まで歩いている。

達規、その後ろ姿をひたすら見ている。

百合奈、少し足取りが軽くなっていく。

達規、百合奈の背中を見つめながら、

達規M「好きだよ。そう口にしたときに、この恋はきつと一生忘れられない恋になると思った。俺はただ彼女の背中を見ることしかできなかつた」

百合奈、歩きながら、

百合奈M「好きじゃなくなった。そう口にしたときから、体は軽くなっていた。未練を残さないように全てをそこに置いて、私は前を向いた」

タイトル『わたしたちの失恋』

○日替わり・同・部屋（昼）

T 「3ヶ月後」

百合奈 M 「これは、ある日の私」

鏡を見てピアスをつけている百合奈。

鼻歌を歌い、靴を履き、玄関から出ようとしている百合奈。

玄関の内側に、逆さまのゆりの花がドライフラワーになっている。

百合奈 M 「あのゆりの花はドライフラワーにした。これを見る度、ちよつとだけ思い出す」

手に持っているスマホのLINEの通知音が鳴る。

左にスワイプし、削除している百合奈。

○同・外・（達規の夢）

車に乗って外を見ている達規。

百合奈、笑顔でこっちに向かって来て

百合奈 「（乗り込みながら）おはよ！」

達規 「おはよ！」

百合奈 「（こっちをじっと見てくる）……」

達規「どうした？」

百合奈「（まだじっと見てくる）……」

達規「あ、前髪可愛いね？切った？」

百合奈「（笑顔で）本当達規って優秀だよね」

達規「優秀って（笑）」

達規、百合奈の手を握り

百合奈「（ちよつと笑顔になり）……何？」

達規「いや繋ぎたいなって思ってた」

百合奈「……（照れて）そっか」

達規「……（手を握っていて）てか、冷たいね」

○達規のアパート・部屋（朝）

充電されたスマホのアラームが鳴る

達規、それを止め、目を覚ます

達規M「これは、ある日の僕」

横を見るが百合奈がいないことに気づ

き起き上がる達規

すぐさま、スマホを充電器から抜き

『元カノ、夢占い』で検索する達規。

『元カノが車に乗ってくる夢は近々復縁できる暗示』という記事を見つけ、

達規「（少し微笑み）……」

と、カーテンを開け、身支度をする

百合奈に、LINEで『久しぶり！元気？』と送っている

了